

特116

692

高野為狂

木曾

楠露

菊意童

觀世流改訂謄本

卷外二



始



特116

692

高野物狂

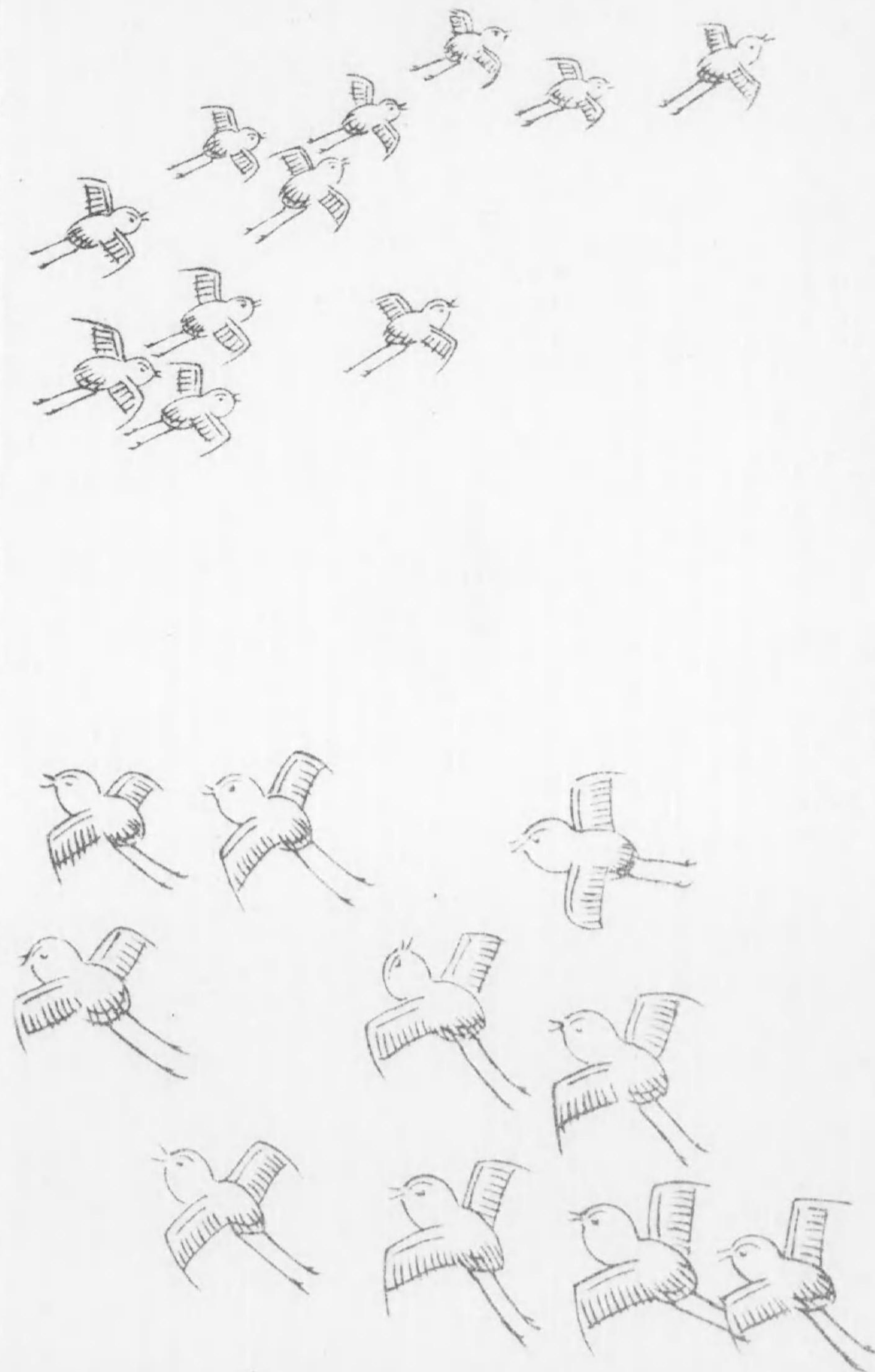
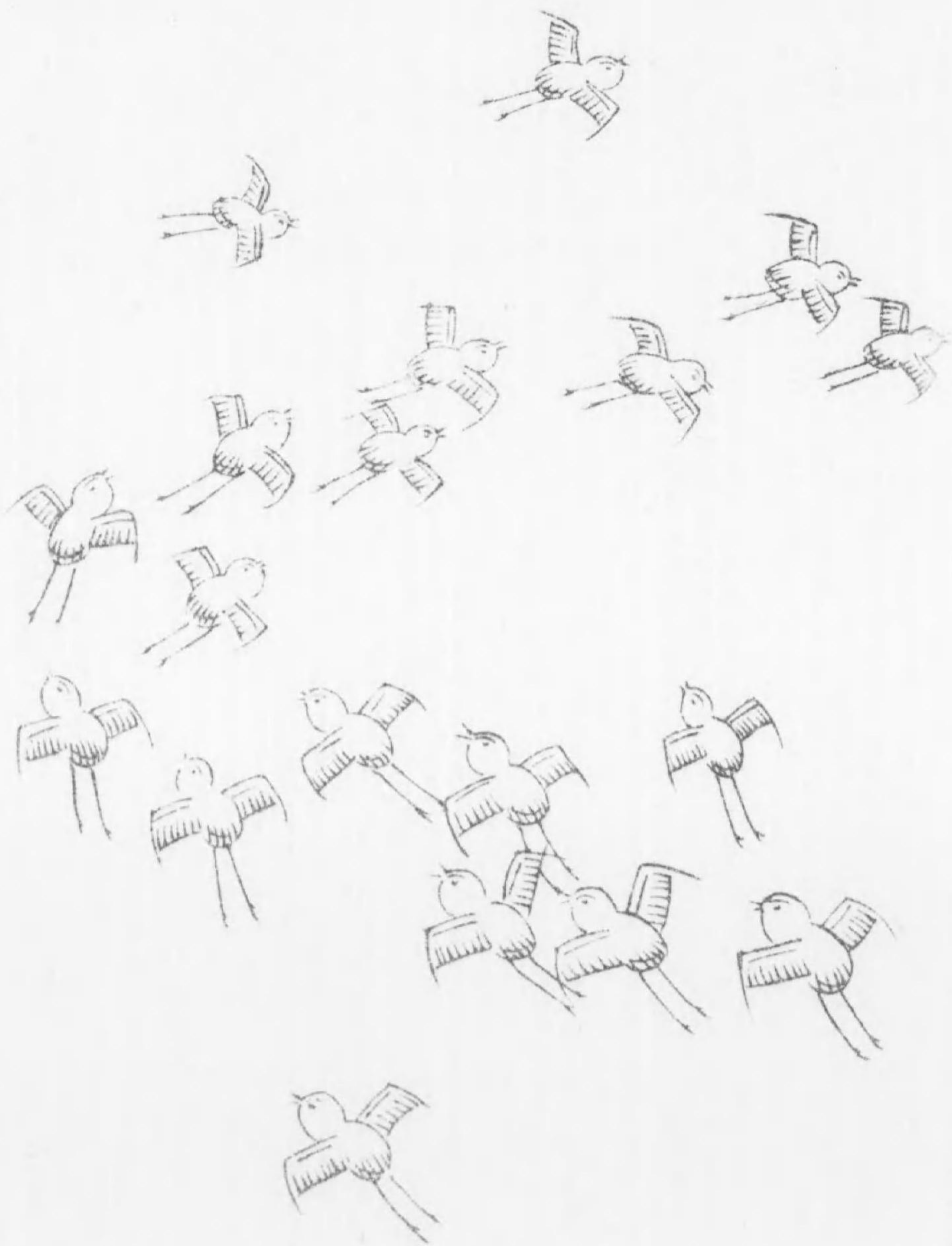
木曾

楠露

菊慈童

觀世流改訂謄本

番外二



觀世
清之
長之

高野物狂

解題

高師四郎といふもの主君の遺児が遁世せしを悲しみ、狂氣して尋ね廻り、遂に高野山にて邂逅せることを作れり。曲名を略して高野ともいふ。申樂談儀に世阿彌の作なる由見え、能本作者註文には一所に世阿彌の作とし、亦別に作者不明とも記せり、二百十番諸目錄に安清作とあるは如何あらん、世阿彌の能作書に「丹後物狂、かうや、あふさか、如此遊狂」云々。

謠ひ方便概

男物狂を作れる曲なるが、狂女物程に繊細なる表情を須ひす。

シテ

通じて位（正）の重くならぬやう注意し、一張一弛よく文情に添ふを要す。初の名告以下は大きくハハハと云ひ、サシは改めて殊勝に確りと出づ。「あら思ひよらずや」云々はむつくりと出で、一息おきて、れ受け難き（正）云々の文に移り、一鉢にハツキリ居つかぬやう謠ひ行き、終の「墨衣」云々を詠歌の心に更へて、と扱ふ。後の「薄墨」云々は聲を稍上に取り、かゝつて出、「歸る雁の」と續き好く詞に移り、カトルより、きやかになり「誘はれし」云々を別に出で暢びやかに謠ひ、「肌身に添ふる此文を」はたつぷりと扱ひて地に渡す。「いつかさて」は前を承けて出づ。問答はは落着好く確りと應へ行き、「事新しき仰かな」より少しづつ、かゝり連吟「昔薩埵の」云々を稍靜に謠ふ。サシはさらりと、ウセの上端は穩なるべし。ワカは朗かに大きく、「花壇場」は派手々々しくならぬやうに乗つて聊かかゝりめに出づべく、「高野のうちにては」にて普通の調子に返る。「や、あれにまします」云々はかゝつて出で確りと丁寧にいふがよし。

子

大方の子役と同じく高めにさらりと謠ふ。

ワキ

少しく位を持つ程の心にて確りとあるべし。

地

初の上歌はシテの氣を受けてつゝまじやかに扱ひ、「書き残されし」云々の下歌は更へてゆるやかに、次の上歌は派手にならぬやうに稍運びをつけて謠ふべし。後の「風狂じたる」云々は前を承け、「ふどころ

14. 10. 内交

紙と云々もすらりと、「麻裳よし」の上歌は引き立て、爽やかに淀みなく詠ふ。「いつかきても」もさらりと取り、「三鉢の松の下に」をはずきりと扱ふべく、問答を隔て、「大師の待ち給ふは」云々は聊かゆるやかなるべし。クリ以下は高野山の有様を述ぶる處なれば改めて靜かに品好く確りとあるべく、「クセは釋教の心を本とし、寂びを持ちて殊勝にゆかしきやうなるが宜しけれど、徒に弛まざるやう心附を要す。「尋ね來し」は別に出で暢びやかに大きく氣をかけ、「時も春の」は少しくゆるやかに、「花壇場」より華やかにならぬやう縮まり好くかゝりめに詠ひ、「高野のうちにては」云々はさらりと附けて、始の「御聖」より段々に鎮む。キリの「御袖に」云々はかけて出でさらりと爽やかに詠ひ納むべし。

辭解

平松殿

平松の領主を尊びていふ詞。されど平松の名常陸にあるを聞かず。或は平町(ひらまち)にて今茨城郡宍戸町の大字となれる處にや。

昔在靈山

昔は靈山

にありて法華と名づけ、今は西方に在りて阿彌陀と名づけ、娑婆には觀世音と現る、名はそれ／＼異れども三世にわたりて利益は同じく一鉢なりとなり。古來南岳慧思禪師の偈文と傳稱すれども禪師の著書中に見えず、叡山の僧侶の作りたるものならんといふ。名法華といひて經名を出し他の彌陀觀音の佛名を擧ぐるに異り、第二の八字あるなど支那僧の作にあらざるは明けし。悲願 大悲心を起して慈眼視衆生 法華經普門品の語。慈悲の眼を以て一切衆生を平等一視する意。誓普普 觀音の誓願の普く一切衆生に及ぼすを日光の萬物

其の恩徳を亡君の後世まで及ば 受け難き人身 涅槃經に「人身難得、如優曇華、法華經功德品に「言し與へ給へど祈る意を綴る。此經深妙、千萬劫難得遇、平家物語に「人身は受け難く、佛敎には遇ひ難し。如來 佛を指す。佛十號の一。閻夜の燈 法華經藥王品に「如子得母、如三途 地獄、畜生の三惡道を言ふ。一子出家 孟蘭盆經に「七世父母、雖餓鬼苦、得生天人中、無爲に入らば 生住異滅のなきを無爲と云ふ。涅槃の異稱。茲には無爲涅槃の道に。黑衣 袖はぬれけり」まで和歌入らばの意。清信士度人經に「棄恩入無爲、眞實報恩者」。

幼君に譬へたる若木の花を承けて實三世の契 三世は過去現在未來。主従は。高野山 紀伊國伊都郡の南偏山の頂に平野あるが故に高野山といふ。弘仁七年弘法大師奏請して此山三鉢の松 三鉢は三股の形の金剛を置き、山上の平地に金剛峯寺を創立し、以て眞言密敎の道場とせり。蘇武が文 漢の蘇武、胡國に使用する器具。三鉢の松は高野山の御影堂の前に。薄墨に 後拾遺集の歌。末句 蘇武が文 漢の蘇武、胡國に使用する器具。其由來は下の本文に出でたるが如し。雁に帛書を結びつけて故國に消息 雁の帛書を結びつけて故國に消息を通せりといふ故國に寄せて綴る。うはの空 捕へごころのなき様にいふ。陸奥紙 遙々の道を陸奥に置く意にとりなし縁あらしめて紙にいひかく。陸奥紙は古昔陸奥より産出せし檀紙。おぼつかない 不安心なるを嘆する詞。古今集の歌「おちこちのた胸におきて次 呼子鳥 鳴く聲物呼ぶに似たる深山の鳥なりといひ傳ふれど明なら 花の行くへ 幼君に譬ふ。花といへるより落花をさそふ狂風を出して幼君をたづねて狂氣したる意を寓す。麻裳よし 枕詞 紀の關 一名白鳥の關。紀泉の境にありし弓云々といへる古歌を胸 筑波の山やらん 筑波山は木の繁れるにて名高く、「つくば山」このものか多ければ、高野の山深く木蔭の繁みを分け行きて故郷を思ひ出せる心なり。夕山松の 言ふを夕山に掛く。根ばふ道は根のはびこる。鳧鐘 こと。周禮に 言語道斷 詞に盡し難き意。轉じて言説すべ。結果 伽藍又は戒壇を建つるに一種の作法を「鳧氏爲鐘」。

高野山の結界地は 入り定れる高野 結界清淨の地に入るを入定に掛く。入定は禪定に入るの義。轉じて七里四方なり。發心初縁 初めて菩提心を發し佛道 人佛不二 迷へば人間凡夫、悟れば佛陀聖者、

修行之たよりを得ること 迷悟の相、異なるのみにて、理體の上

よりいへば二者不二なりとなり。内身三昧云々三昧は梵語、正定と譯す。茲に内身とあるは肉身を誤りたる生物一如、凡聖不二なりと同意。大師肉身に三昧を發得し高野山に入定せるは、人佛不二の現證なりとなり。平家物語に大師の教使に返事

の語中、「肉身に三昧を證して慈氏の下生を待つ」と。生ありながら云々大師の生身のまゝ涅槃に入れるを證悟すること。茲に生死涅槃といへるは「生死即涅槃」の語あり。薩埵の印明略薩埵は梵語の菩提薩埵の略。菩薩と略稱せるに同じ。茲に薩埵のまゝ涅槃に入るの意に用ひたるなるべし。

薩埵の印明略薩埵は梵語の菩提薩埵の略。菩薩と略稱せるに同じ。茲に薩埵のまゝ涅槃に入るの意に用ひたるなるべし。

形を結び以て法徳の標幟とする事。明は口に唱ふる陀羅尼即眞言にて、短句を眞言又は呪といひ、長句を陀羅尼又は大呪といふ。共に其一字一句に無量の意義を含有するものとして梵語の原音を誦し、翻譯することをせず。

慈氏の下生住し、今より五十六億七千萬年の後、人間界に下生し、釋迦の如く成佛すべしと豫言せられ慈氏は彌勒菩薩のこと。次に慈尊といふも同じ。彌勒は釋迦に先ちて入滅し、兜率の内院に

住し、今より五十六億七千萬年の後、人間界に下生し、釋迦の如く成佛すべしと豫言せられ

し佛。其出生の時は華林園中の龍華樹の下にて三度の法會を開き一切衆生を濟度無人聲法華經の「寂滅無

すべしといひ、之を龍華三會の曉といへり。次に慈尊三會の曉とあるはこれなり。

無人聲法華經の「寂滅無すべしといひ、之を龍華三會の曉といへり。次に慈尊三會の曉とあるはこれなり。無人聲法華經の「寂滅無すべしといひ、之を龍華三會の曉といへり。次に慈尊三會の曉とあるはこれなり。

大平城天皇御宇の年號。こゝには二年と作れ同弘法大師が支那にて三結を投げ高野山の松に懸りしこ同弘法大師が支那にて三結を投げ高野山の松に懸りしこ

眞如平等の松風眞如は森羅萬象に徧在する平等無差別の理躰なれば、松風の吹き渡らぬ處なきに譬眞如法

性隨縁の月眞如法性隨縁の月眞如法性隨縁の月眞如法性隨縁の月

八葉の峰高野山大塔の四方四隅に繞れる峰を内八葉といひ、奥の院の外に聳ゆるを外八葉といふ。八葉の蓮華に擬したる稱。眞如法

八つの谷高野山中、峰嶺の間にある平地にて深間にあらず、通例八谷といへど實際は十數谷の名あり。平家物語に「八葉の峯、八つの谷、

八つの谷高野山中、峰嶺の間にある平地にて深間にあらず、通例八谷といへど實際は十數谷の名あり。平家物語に「八葉の峯、八つの谷、

即身成佛肉身の其まゝ佛となるの意。「父母所生身、即證奥の院大師の入定せる無常肉身の其まゝ佛となるの意。「父母所生身、即證

觀念深山鳥の聲、飛花落葉の嵐まで、世の生滅無常を觀察想念せしむるたよりなりとなり。常住生滅無常は又常住不變なる本躰の現象なれ

觀念深山鳥の聲、飛花落葉の嵐まで、世の生滅無常を觀察想念せしむるたよりなりとなり。常住生滅無常は又常住不變なる本躰の現象なれ

光陰惜むべし顏氏家訓に「光陰可惜、譬諸逝水」時人顏氏家訓に「光陰可惜、譬諸逝水」

常樂の夢無常苦惱の世を常常樂の夢無常苦惱の世を常

尋ね來し或は引花壇場季節の風物を高野山中の名所に配す。壇場は金剛峯寺の主

傳法院聖憲法親王の内奏により鳥羽上皇の勅命を以て大治年中に創立せられしもの。後金剛峯寺の住侶と此寺の學侶との間に紛争を生じ正應元年賴瑜寺基を同國那賀郡根來に移せり

三寶院蓮華谷に三寶院蓮華谷に

裝束附

前シテ(高師四郎)前シテ(高師四郎)

着附段熨斗目、襟淺黄、素袍上下、小刀、扇、珠數。

侍烏帽子、着附段熨斗目、白大口、掛素袍又は水衣にも、扇(挿)、文(竹に挟み持つ)。

高師四郎

子方 (平松春滿)

角帽子、襟赤、着附小格子厚板、桂水衣、緞子腰帶、扇、珠數。

ワキ (高野山僧)

角帽子、着附段熨斗目、白大口、水衣、腰帶、扇、珠數。又着流僧にも。

ワキツレ (從僧二人)

角帽子、着附無地熨斗目、白大口、水衣、腰帶、扇、珠數。又着流僧にも。

四番目
畧二番目

高野物語

無季

子方 春滿 丸
シテ 高師 四郎
ワキ 高野山住僧

シテ行 (健カニ大キク)

これ常陸の國の住人平松殿よ仕入
申も。高師の四郎と申も者まてい。情
も頼み奉る平松殿ハ。去年の秋実一
ならせ給ひてい。又春滿殿と申して
子方の居座ら。いまだ幼くまのまよ
よう。某もあつたて申せとの居貴言まで

の程も。片時も離れ申さず。春満殿を
もりたて申す。又今日平松殿の法忌

日まての向寺より来りて存る

昔在靈山名法華。今在西方名阿

彌陀。娑婆世界現觀世音三世利益同

一體。げありがたき悲願也。慈眼

視衆生悉く。慈眼視衆生悉く。誓

×文

シテ初(確カニムツクリ)

あら思ひよらむや。まづくは文を

見らむも。それ受け難き。身

を受け。逢ひ難き。如來の教法よ。逢

ふ事。簡便の燭。渡りの舟。待ちえたる

高麗物語

心ちきても。ちかたあし夢の世よ。今を
捨ても。たづらぬ。三途も帰らん
こと。歎きても猶餘りあり。此生よ此
身ウチノミを。子の時トキを。頼むま。
中(氣ラ更ヘテサラリメニ)
然らば。子出まわ。七世の父母成
佛ブツと。此身ウチノミを捨て。無為ムイよ入
ら。別れ。父母の片事カタコトのみ。生ナマの

親オヤジを助タシけ。こゝろよ。如ごとくと思おもひ
き。つ。家ウチを出でで。修行シュウギョウの道ミチよ。赴おもむく
あり。父母オヤジハハよ。別わかれ。其後そののち。唯ただおこを
こそ。ひたひたままららよ。母ハハも。頼たのみみつれ。
かく。も申まをささで。別わかれ。こゝろ。ちかたあし。の
恩オンの。父母オヤジハハよ。再またび。別わかれ。心こゝろちちききて。名な残ざん
こそ。惜おぼししううららいいままひひて。尋たずねね給たまふふよ。

三年がらうちよの必^{間ヲ置キテ別ニ確カリ}ず必^ハず身^ハの行^ハく
 ちも知ら^ハせ申^ハさん。墨衣思^ハひた^ハてとも
 さま^ハせ^ハ出^ハづる名^ハ残^ハの袖^ハ濡^ハれけり
 書^{カニテ}き^{拍子合}残^ハされ^ハ言^ハの葉^ハの若^ハ木^ハの花^ハを
 だ^ハき^ハだ^ハて^ハ身^ハのあ^ハる果^ハのい^ハち^ハあら^ハん
 怨^ハめ^ハの^ハ事^ハや。怨^ハめ^ハの^ハ事^ハや。
 だ^ハも^ハせ^ハを^ハ捨^ハて^ハ給^ハよ^ハも^ハ。世^ハの契^ハある

ものや。いづ^ハく^ハま^ハでも^ハも^ハ供^ハよ^ハも^ハど^ハや^ハ伴^ハひ
 給^ハよ^ハめ^ハぞ。今^ハの^ハ散^ハり^ハや^ハく^ハ花^ハ守^ハの^ハ頼^ハむ
 木^ハ蔭^ハも^ハ嵐^ハ吹^ハく^ハ行^ハく^ハや^ハい^ハづ^ハち^ハ雲^ハ水^ハの
 跡^ハを^ハ慕^ハひ^ハて^ハい^ハづ^ハく^ハも^ハ知^ハら^ハぬ^ハ道^ハよ^ハぞ
 い^ハぞ^ハよ^ハひ^ハる^ハ知^ハら^ハぬ^ハ道^ハよ^ハぞ^ハい^ハぞ^ハよ^ハひ^ハる
 浮^ハ世^ハの^ハ夢^ハも^ハさ^ハめ^ハぬ^ハべ^ハ。浮^ハ世^ハの^ハ夢^ハも
 さ^ハめ^ハぬ^ハべ^ハ。業^ハを^ハは^ハ法^ハを^ハ頼^ハむ^ハあり

口半次第上(確カニ弛ミナク)

(三人)

(拍子合)

高野物語

ヨ

羊引

(稔カニ確カリ) コオ

ヤサン

ふりて高野寺の僧もしてよは

摩訶菩提の心も知らず

来り給ひ出家の志の由もて愚僧を

志頼みいれども尋ぬ人もや

らんと様ごよしたまひ日を送りしは又

今日の三鈷の松よ伴ひて慰め申さ

やと存の(天キク) 薄墨の書く玉音早と見

(天キク)

ニテヤサン上

(狂心ニ朗カニカウツテ)

(拍子不命)

(弛ニナク)

カリ

(狭カニカウツテ)

ゆのあま霞の空よ帰る雁の翅よ

つひに蘇我が文その故郷の旅衣

(確カリメニ)

カニ上 (聊カ浮キセカニスラリ)

ニト

君を忘れぬぞありわれもま君の所

ゆく入の空ある馬跡を尋ねやあ

とはさぐの陸奥紙の書き残も文

こそ君の形見ありあらおぼつか家の

身身の行くやあ 呼子馬 誘

(氣ラ更ヘテサラリ)

一セイ上 (別ニ長閑ニ)

ラウリ了勿王

エ

れ。花の行くを尋ねつ

風狂(前ヲ承ケテタスアリ)

トたる。心あ
肌身は清よ此

文やふところあみと。人や見ん

上歌(引立テ、爽カニ定マズ) 麻裳あり。紀の岡越えて名は聞きし。

紀の岡越えて名は聞きし。これや高野

の山深み。敏原みの木蔭もけ行けバ。

とも筑波の山やらし。我が方を思

出の昔やあまも。猶我が主君

恋や。山松の根をよ道や。さや

狂ひ登らん。いざ。狂ひ登らん。ま

昇る雲路の。ま。昇る雲路の。こ

いづく高野山よ。ま。見て見れば。たよ

や。或ハ念佛。稱名の聲。或ハ見鐘

鈴の聲。耳は深み。心澄みて。お狂の狂

念佛稱名の

高野物語

ハ

一、(前ノ承ケテ朗カニ) 高里の山に、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹あり。

二、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹の下の石に、(前ノ承ケテサラリト) 高里の山に、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹あり。

三、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹の下の石に、(前ノ承ケテサラリト) 高里の山に、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹あり。

四、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹の下の石に、(前ノ承ケテサラリト) 高里の山に、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹あり。

五、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹の下の石に、(前ノ承ケテサラリト) 高里の山に、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹あり。

六、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹の下の石に、(前ノ承ケテサラリト) 高里の山に、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹あり。

七、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹の下の石に、(前ノ承ケテサラリト) 高里の山に、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹あり。

八、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹の下の石に、(前ノ承ケテサラリト) 高里の山に、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹あり。

九、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹の下の石に、(前ノ承ケテサラリト) 高里の山に、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹あり。

十、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹の下の石に、(前ノ承ケテサラリト) 高里の山に、(前ノ承ケテサラリト) 櫻の樹あり。

四郎の由も昔者よていづ。某を尋ねて
 申す。物ねとあつた。いと思ひつゝ
(角立タヌヤウニ) 言語者断。からぶ。昔者のつら入
(子方(サラリ)) 暫らく思ひ子細のつら入。まづ知らぬ
 由もて詞やあけて。成體入。つら入
(別ニ敷ラ更ヘテ確カニズカト) 心得
 申す。不思議や。姿や見れば。異形ある
 あり。あつ。此高野のつら入。痛ひ

早(健カニサラリ)

あり。早(健カニサラリ)おやうの出家の望あらば。何

そて様やぶあくさるぞ。早(穩カニスラリ)安を更め

ぬこそ發心初縁の形あり。早(確カニ)

發心初縁あらば。人佛不二の道ハ知れ

りや。事新(順次ニカウツテ)き行あま。あたしけ

あくも大師の身ハ。内心ニ昧目前

あり。早(確カニカウツテ)おら

殊勝ありげも大師(カニ上)ハ生ありあがら

生死涅槃(シテ)ハ(確カニカウツテ)分定まれの高野

の真(早)今此山(早)よまのあたり。昔薩

垂の印(早)暇(早)を授あり。慈氏(早)の下生を

待ち給(早)事。人佛不二の妙體あり

大師(地上)の待ち給(拍子合)よ。慈尊(早)三會(早)の曉

われハ三世(早)の至君(早)を尋ねてこの高野

山カサよス素スりリたタりリ 甲カ ククリリ上上 (品好ク確カニ立テ) 折セこコのノ高タカ野ノ山ヤマとト申マ...

まマるル帝テ都トをヲ去サつツてテ二ニ百ヒャク里リ人ヒト家カをヲ離リ...

ひヒてテ無ム人ヒト聲コエ (シテ) ちチねネばバ末マ世セのノ隱カクレ所トコロ (地)

てテ結ムス界カイ清ス浄ジヨウのノ道ミチ場バだダりリ 中ナカよヨ (運)

もモ此コノ三サン鈺キョクのノ松マツハハ大ダイ同ドウ二ニ年ネンのノ法ホウ歸キ朝テウ...

以モ前マエよヨ我ガらラ法ホウ成テイ就ジユウ圓エン滿マンのノ地チのノ志シをヲ...

はハ殘ノコりリ留ドまマりリとト三サン鈺キョクをヲ投ナげゲさサせセ給キ...

ひヒーーよヨ雲クモもモもモよヨ飛トビびビまマりリ此コノ松マツのノ...

梢ハナよヨとトまマりリ (前ニ於テ) そソもモくク 諸シヨ本ホンのノ...

中ナカよヨあアまマりリ (地) 松マツよヨ留ドまマりリ其ソノたタめメにニ...

千チ代ダイ萬マン代ダイのノ末マタかカけケてテススーーかカれレまマのノ成テイ...

誓チカ願ガン委ヰくク舊コウ記キをヲ載サイせセらラれレたりリ (打切)

さサらラぬヌもモやヤ真マコト如ニ平ヘイ等トウのノ松マツ風カゼハハ葉エフ...

のノ峯ミネをヲ静シズまマ吹フきキ渡ワりリ法ホウ生セイ隨ズイ縁エンのノ...

高野物語

ト

月ツキの影カゲハハつハの谷タニは日ヒ雲クモらぎらぎぎしてままこ
 とよとよ三さん會かいの曉あけを待まちつつ如ごとくありあり。さて
 ここそそ即すなは身み成なり佛ぶつの相すがたをあらあらききしし入い定ぢやう
 の地ちを示しししつつ。深ふかききたる奥おくの院いん。柔な山さん
 鳥とりのこゑこゑ澄すみみみて。飛と花はなを落お葉はの嵐あらしまで。
 無む常じやう。觀くわん念ねんを勸すすむむことことししてもも又また常じやう
 任じんの旨みづか令れい佛ぶつ道だう圓えん覺かくののよよししををああめめ

池池
(前ヨリ)

ありあり。然しかれれバ時とき移うつりり事こと去さりりて
 四季しきちちりりくくのおおののづづからら。光ひかり陰かげ
 惜おぼむむべべしし。時とき人ひとを待まちたたざるるはは貴たか賤しん君きみ羣ぐん
 集あつの雲くも衣え殿てんかからら高たか野のの山さん高たかみみ谷たに嶺の
 風かぜ常じやう樂らくの夢ゆめささめめ法ほふの稱なづ名な妙めう音おんの
 心こころ身みは残のこりり満みちち満みちちてて唱なへへ行いふふ因いん
 法ほふの聲こゑハ言こと高たか野のよよてて静しずかかるる雲くも平へい地ちありあり

高野物語

けり上(別)又(場)ビヤカニ大キク 尋ね申(舞) 霞申(舞) の奥申(舞) の高申(舞)

野申(舞) やま申(舞) 時申(舞) も春申(舞) の花申(舞) 壇申(舞) 場申(舞)

花申(舞) 壇申(舞) 場申(舞) 日申(舞) 傳申(舞) 法申(舞) 院申(舞) 紅葉申(舞) 二申(舞) 寶申(舞) 院申(舞) より

も猶申(舞) 深申(舞) く申(舞) 雲申(舞) の奥申(舞) の院申(舞) あり申(舞) も申(舞) こ申(舞) れ

より申(舞) も申(舞) いら申(舞) も申(舞) 常申(舞) 般申(舞) 石申(舞) の三申(舞) 結申(舞) の松申(舞) 蔭申(舞) よ

ま申(舞) ち申(舞) よ申(舞) る申(舞) 春申(舞) の風申(舞) 狂申(舞) たる申(舞) 物申(舞) 狂申(舞) 物申(舞) 狂申(舞)

あ申(舞) ら申(舞) 恐申(舞) れ申(舞) や申(舞) 高申(舞) 野申(舞) のう申(舞) ち申(舞) よ申(舞) て申(舞) ら

地 (前) 承(テ) サ(リ) ト

高申(舞) 野申(舞) のう申(舞) ち申(舞) よ申(舞) て申(舞) ら 謳申(舞) ひ申(舞) 狂申(舞) ら申(舞) め申(舞) 吉申(舞) 制申(舞) 戒申(舞) 也申(舞)

忘申(舞) れ申(舞) て申(舞) 狂申(舞) ひ申(舞) たり申(舞) 許申(舞) さ申(舞) せ申(舞) 給申(舞) へ申(舞) 狂申(舞) 聖申(舞) 許申(舞)

さ申(舞) せ申(舞) 給申(舞) へ申(舞) 狂申(舞) 聖申(舞) や申(舞) あ申(舞) いら申(舞) も申(舞) あ申(舞) れ

あ申(舞) いら申(舞) 高申(舞) 師申(舞) の四申(舞) 郎申(舞) とい申(舞) へ申(舞) あ申(舞) ら申(舞) 狂申(舞) 狂申(舞) 也申(舞)

こ申(舞) の申(舞) ま申(舞) まで申(舞) 来申(舞) り申(舞) た申(舞) ら申(舞) ぞ申(舞) や申(舞) あ申(舞) いら申(舞) も申(舞) あ申(舞) れ

ま申(舞) ま申(舞) へ申(舞) 春申(舞) 満申(舞) 殿申(舞) とい申(舞) へ申(舞) 狂申(舞) 狂申(舞) 也申(舞)

こ申(舞) の申(舞) ま申(舞) まで申(舞) 来申(舞) り申(舞) た申(舞) ら申(舞) ぞ申(舞) や申(舞) あ申(舞) いら申(舞) も申(舞) あ申(舞) れ

73
法意やぶらむ
背切んこ
トモ

たゞひし身や捨て給ふも。いづでり
 捨てさせ申さるも。心や静めて聞
 めせ。平松の唐名字を誰うつかせ給ふ
 らん。まづ此度の身歸りあつて。さて
 其後ハもかくも。法意やぶらむ。替
 めんと（拍子合）。袖よさうつきて。三世の
 契朽ちせぬぞ。こゝまで尋ね紀の國や。

かん上（カウツテスラリト）

地上（カウツテカカニ流マズ）

替（拍子合）

え又

高野トの山ヤの陰頼カむ。至君ヤの達スよ。嬉シ

しきキリ中。かくあるべし。あはれ。あはれ。高

野ヤの出カまき。いぞ。あたり慰め。古里ユ。

身供以下聊カユルナテ申し。帰ハつ。つ。も。も。ゆ。く。末ス榮シえ。

けり。これ。も。は。法リや。め。の。大師ナの。惠ケ

あり。けり。や。大師ナの。惠ケあり。けり。

木曾

解題

別名を木曾願書、埴生(羽生)ともいふ。木曾義仲砥並山にて埴生八幡宮に詣で、覺明が筆を揮ひたる願書と鏑矢とを奉納して戦勝を祈り、やがて俱利伽羅の谷に大捷することを作れり。能本作者註文に作者不明と見ゆ。

謠ひ方便概

總じて勇健なるべし。

シテ

堂々として迫らず、太く逞しかるべし。出の一聲は大きくがつしりと謠ひ、木曾との問答は確りとし、鄭重なるべし。「いかに申し上げ候」云々はハッキリと言ひ、「又此庄の土民」と氣を更ふ。「畏つて候」はさらりめに出で、「八幡の宮の神風に」とかゝつて爽やかに謠ひ地に渡す。次の「畏つて候」もすつきりと應ふ。

ツレ

木曾、池田、共に健やかにテキハキと扱ふべきも、木曾は主將なれば威を有つ程の心あるが宜し。素謠の時には立衆を要せず。「箴のうちよりも」云々は抜けぬやうに附けて弛みなく謠ふ。願書の後「木曾殿を」云々は締まり好く出づべく、「これを願書に」云々はさらりめなるべし。「敵は木の葉」と云々は承けて朗かに、次の同句亦引き立て、すつきりと扱ひ、「酒宴もすでに」以下は乗つて颯爽たる趣に謠ひなす。

辭解

八百萬神も 天照大神日本の地を治めたまはんとて、天若日子に天の鹿兒弓と天の鹿兒矢とを賜ひ、天降らしめ給へること記紀に見えたるを引き、弓矢の道の神代此方久しきを述ぶ。八百萬は多くの神々、鹿兒の弓は鹿を射る弓なりと傳ふ。

木曾義仲

源義賢の二子。木曾に在りて乳母の夫中原兼遠に育てられし軍を敗り、追撃して京師を奪へり。此に作れるは其平氏を敗りし時の事なり。後、横暴を極め、さても平家は爲頼朝等の反感を受け、範頼義經に襲はれて壽永三年終に粟津野に戦死せり。享年三十一。さて平家は壽永二年四月義仲其將を越前に遣して燈城に守りしも、平泉寺長吏齋明の徒反きたる爲、其二十七日平維盛等十萬餘騎に敗られしこと、源平盛衰記、平家物語等に出づ。燈城は今明ならざれども同書によれば

以て云自己の力量を顧みず輕々しく大望をぞげんとするに喩ふ。東方朔の答客難(漢書)。蝻螂が斧を云

同じ意の喩。文選に「欲以蝻螂之斧禦隆車之神明神といふ。上指上指の矢の略。矢を箠に盛る時、二十五本の矢の中に鏑矢二本を

箠の表に指すもの稱。即ち鏑矢といふ。鏑矢は鏑の部分を木にて圓く作り、中部を。内陣本殿の奥に神體を安置する所。

ゆゝしくここにはいさ。此庄植生神風神威を風に喩へたる語。ひとさし一曲山鳩翼を云平家物語に

薩、眞實の志一つなきをや、遙に照覽し給ひけん、雲の中より山鳩(盛衰記には白鳩)三つ飛び來つ。加護神の

神力神の威力

願書 (平家物語)

歸命頂禮八幡大菩薩、日域朝廷の本主累世明君の曩祖なり。寶祚を守らんがため、蒼生を利せんが爲に、三身の金容を顯し、三所の權扉を押し開き給へり。爰にしきりの年以來平相國といふものあり。四海を管領し、萬民を憐れしむ。これ既に佛法の怨、王法の敵なり。義仲苟も弓馬の家に生れて、僅に箕裘の塵を繼ぐ。彼暴惡を案するに、思慮を顧る能はず。運を天道に任せて身を國家に投ぐ。試に義兵を起して兇器を退げんと欲す。然るに關戰兩家陣を合するといへども、士卒未だ一塵の勇を得ざる間、區々の心を恐れたる所に、今一陣に旗を擧ぐ。戰場にして忽に三所和光の社壇を拜す。機威の純熟明らかなり。兇徒誅戮疑なし。歡喜涙こぼれて渴仰肝にそむ。就中、曾祖父前陸奥守義家朝臣身を宗廟の氏族に寄附して名を八幡太郎義家と號せしよりこのかた、

壽永二年五月十一日

源 義 仲 敬 白

裝束附

シテ (覺明)

袈裟頭巾、襟花色、着附厚板、込大口、長直垂、扇、太刀(佩)、後に文。

ツレ (木曾義仲)

梨打烏帽子、白鉢卷、襟淺黄、着附厚板、半切、法被、腰帶、太刀(佩)、扇(挿)、弓矢(持)。

ツレ (池田次郎)

梨打烏帽子、白鉢卷、着附厚板、半切、法被、腰帶、扇、太刀(佩)。

ツレ (立衆四五人)

梨打烏帽子、白鉢卷、襟朽葉淺黄花色取ませ用ふ、着附厚板、白大口、側次、腰帶、扇、太刀(佩)。

計略をもつて防めんとして
白旗數多（健力池）
その入つて。黒坂のよよありきて。敵
の心を疑さしめ。山中（サシナケ）またむろさせ。夜よ
のり大手搦手より。一度よあり俱利
伽羅が。今へ敵や落さん（カクキ）と。
用意（指十回）を
あつて義仲ハ。用意（打切）をあつて義仲ハ。
勢や七手よ別ちつ。其身ハ殊（セ）も精兵（シウヘイ）。

一萬餘騎（マンニョウキ）を引き從へ。植生（ウキナ）よ陣（チン）をぞ
おろしよける。植生（ウキナ）よ陣（チン）をぞおろしよける。

池田（イケダ）の申しよげは。諸説（シヨセツ）の如く黒坂（クロサカ）の

よよ。多くの白旗（シラハタ）を立てしは。平家の
勢（セ）このやを見て。あつたや源氏大勢向う
たる。取つてめらつて。通（ツウ）よま。こころ
便宜（ベンイ）の處（トコロ）ありつと。礪波（トシノ）の山中（サンチウ）猿（イヌ）が

馬場の申も處は陣をとりてい 義仲(英カニ)

こそ義仲が願ふ處あり。たあらが矢

合の明日たるべし。あまゝて身方を戒め

戦をまゝして。夜よりの押し寄す

ぎのよてい。面よ其由申す 池田(サラリ) 畏つ

てい 義仲(氣ヲ更ヘテサラリ) 池田(サラリ) 前よ

義仲(確カニ淀ミナク) といふはあなたつて夏はまびびの

らちよ。朱の玉恒ほの見えや。かたよ

造の社あり。あつちぶらぐらぐら申せ

い。ちある神や祟め奉りたるぞ 池田(サラリ) ち

あつちを植生のハ幡宮まであたら

給ひい。此處もその諸領の地よてい

義仲(英カニ) 義仲何と無う陣とりよ。ハ幡の

地あるこそ吉兆あり。い。ちよ賢明

又替打切ニ
地拍子

又
より此方平相國と
より此方平相國と

地拍子

四海をたたく
剛健ニ堂カト

地拍子

曾祖又前の陸奥
の守名を
宗廟の氏族に
附せ

其後胤として
ヤニの大功をトモ

ヤニの大功をトモ

開き終へり。爰は志きつものあり。此方。

平相國と。りよものあつて。四海をたか

ごらうよ。萬民を憐れむ。これ。

佛法の仇。王法の敵あり。そもく。曾

祖又前の陸奥の守。名を宗廟の氏族

に附せ。義仲や。くも。其後胤

として。この大功をおこし。たごへ。バ

地拍子

巨海を測り

ぬくあり

地拍子

然れども

起きのみあり

地拍子

勝つことを究め

逃げ給へ

読み上げたり

嬰兒の彘を以つて。巨海を測り。當

椰が芥を以つて。陸車よ向ふ如く

あり。然れども君のため國の為よ。これを

起きのみあり。伏して願をこゝす。神明

納受垂れ給ひ。勝つことを究め。つ

仇や。四方よ。逃げ給へ。壽永二年五月

日と。言高らめよ。読み上げたり。本曾

朱曾

五

殿を初めりて其座あり兵ども
眞よ又我の達者あつて皆賢明を
ほめよけり義仲上義仲上差抜き出
地(前ヨリ運ビテ)これ願書より入内陣に納め
よと賢明も賜ふべし賢明これ
捧げ持ち出前をまきてゆくも
ハ幡の宮より入りけりハ幡の宮より入り

けり覺明曰(健カニハツキリト)しよ申しよげぬは願書並よ

少上差の鎧ハ幡の宮より奉納仕り
てい(氣ヲ更ヘテ)又此庄の土民軍の少り出を祝し

酒肴を奉りての義仲(奥カニサテリ)あらめでたまふ事
こそあけぬ此度の軍は勝たんむ事

必ぎありから軍の口出を祝よべし
賢明酌よまきりけり覺明(サラシ)畏つてハ幡の

宮の神風よ

敵の本の葉と散りぬ

賢明ひさか舞ひひく

畏つては敵の本の葉とちりぬべ

酒宴もきでよあつざあつは酒宴も

までよあつざあつは不思議や八幡

の方よりも山鳩翼をばつて身方の

旗手よ飛び翔り納受の志るを

覺明(スツキリト)

地上(明カニツク)

男舞(拍子合ん)上(奥カニ運)

打上

打上

表しけれども本曾殿をばめ軍兵
もは白一向に伏し拝みいよく加
護やを願ひけるを平家の大

勢や俱利伽羅が谷よ追ひ落した
一戦も勝利を得もまことよ八幡の
神力あり

八幡の神カ

勝利を

谷よ追ひ落

楠露

解題
へりとい

楠木正成、櫻井の驛にて愛兒正行を諭し、故郷に歸らしめし事を作れり。聞く所によれば、喜多流に於て櫻井を採用せしに倣ひ、或人がそれに基きて文を作り改め、之に觀世清廉が節附せしものな

諸ひ方梗概

仲光などに類し、全篇悲壯の氣に満つるものなれども、位の徒に重々となるを好まず。通じて勁健に卒直なるを宜しとす。

シテ

落着好くがつしりであるべし。出の「何事にて候ぞ」は稍聲を下めに取って確りと言ひ、次の「畏つて候」は穩やかに、「いかに申上候」以下氣を更へて出づ。ロンギは聊か靜に扱ひて、粘らぬやう又浮きやかにならぬやうに心附け、順次に詰めて諸ひ行き、終の「主従の」を心持して確りと地に渡す。「清き名を」云々はさらりと、ワカは大きやかにすつきりとあるべし。

ツレ

名有る武將なれば其心を以て常のツレ役よりも位を重く取る。此心得にて名告をハキ／＼と言ひ、「又存する」より氣を更へて少しく抑へめに、「いかに誰かある」を別にさらりと云ふ。「滿一に」云々もさらりとあるべし。「いかに正行」云々は言ひ聞かす心にて確りと扱ふが宜しく、「又滿一には」云々は一息おきて改めて出づ。以下子方との問答弛み無かる可く、「やあかほごまで」云々はかゝつて強みにさらりと諸ひて地に渡す。「借も逆徒」以下語は落着きて手固く、しかも慎ましやかなる心なるべし。サシ以下稍靜かに、クセの上端は丈夫に、ロンギはおつとりとあるべく、「かくて時刻も」云々は確りと諸ふ。

子

稍聲を高めに取りてさらりとあるべし。文句に就き多少の心入れ有り。ロンギの止め「親子」はかけて出づ。

地

初の「正行も」云々はさらりと附け、「位く／＼」より柔みを持ちて緩め、段々に鎮めて確りと諸ひ止む。クリは心持を一新してさらりと、サシ以下滞りなく、クセは確りとしたるところを程好く運びて居着かぬやうに諸ふ。「別れも今更に」云々は前の氣を承けて稍靜かに附け、「お酌に」よりさらりとなる。「流れ久しき」云々はかゝつてさらりと引き立て、出、「花橋の」より乗つて弛みなく諸ふべし。

楠氏の家紋を菊水と記せるより、慈童仙人の菊水の故事(菊慈童、枕慈童参照)によるへ、佳名久しかるべしとの意に云ひなせり。湊川は其水源一は天王谷より一は島原谷より出で、石井村に會して南流し、神戸市福原町及東川崎町の西を過ぎて海に入る川。正成は北川の邊。花橋 楠氏は橋諸兄の後裔にて橋氏なると、花橋は匂香にて戦歿し、其名其地名と共に著しきより斯く綴る。花橋 楠氏は橋諸兄の後裔にて橋氏なると、花橋は匂香す。り合は

装束附

- シテ (恩地滿一) 侍烏帽子、襟花色、着附厚板、白大口、掛直垂、紋附腰帶、小刀、神扇。
- ツレ (楠正成) 梨打烏帽子、白鉢卷、襟淺黄、着附無色厚板、込大口、直垂上下、小刀、神扇。
- 子方 (楠正行) 小結烏帽子、襟赤、着附厚板、白大口、腰帶、扇。直垂上下又は長絹にも。
- トモ 着附無地熨斗目、素袍上下、扇、太刀持つ。

四番目
又二番目

楠 露

五月

トモ 從者
子方 正行
ツレ 正成
シテ 滿一

ツ行 (位重ク、ハキクト)

この楠正成あり。さても朝敵尊氏

大擧一しては落さる由聞一めされ。

急ぎに成よ馳せ向ひ。義貞よ力を合せ

よその言旨よ任せ。唯今兵庫の津へ

罷り下りぬ。又存まざる子細の向正行を

古里へ返りたがやと思ひぬ。いふよ誰らある

南 露

トモ(サナリ)

ツレ(改メテ、キツクノリト)

先前より満一は行をりて此方へ

来り申入トモ(サナリ)畏つてゐる(我ラ更ヘテ)恩地殿

申入ミテ(抑ヘテ確カリト)何事ぞトモ(サナリ)若君の侍供

申し急ぎ侍本陣へ参りあはれとの

侍事ミテ(穩カニ)畏つてゐる(丁寧ニ確カリト)申上げら

若君の侍供申してゐるツレ(云ニ聞カセニ確カリト)は行唯

今申事やまへへ聞かへく借も此

度の出陣シムツギに成討死ウチジニすべき時と至り

たぬ。そむいよつかに正行の満一を伴ひ

千早チワヤは帰り命のあらん程の忠勤チウキニし

上カミを敬ウヤマひ下シモを憐アワレみ某ソレガシの志シをウつキまシらシ入ル。

(一息オキ改メテ)

又満一より正行の成長セイイの程チヨオを頼むあり

こむや此世ワカレの別ワカレと思ひて急イサぎイサまシ里リ入ル

帰カエりカ入ル侍オオセ謹オオセんで承ウケりカらシあらうら。

子方(サナリト)

向ひ。義貞もろもろ。我もくわいの較（キョウ）
 諒（サウ）あり。正成謹んで申しよるやうに。
 此度は逆徒能りよる事。新平（ヤシタキク）とら大軍
 としび（ツカ）警かたたる官軍を以てして。つらめ
 の事。ありく存もよらむ。義貞を
 召し返したる。今一度敵山へ行幸（キョウゴ）あり
 奉りあぶ。必（カナラ）く逆徒は治仕るべし。其時

正成ハ糧道ヲ絶チ。義貞ト内外（ナイゴウイ）より
 攻めしこし。於てハ怒あがらば勝利
 疑ひあるべからむ。必勝（カク）の計議（ケイギ）を申し
 上るも。坊門（ボク）殿のさへ入めて。
 既ニ防戦（ボウセン）の事。偏（ヒナ）ニ天軍（テンクン）の事を
 ありあり（ツヨク）。地（チ）上（カミ）（新シテ引立テ。大キク）
 ありあり。日月（ニツツキ）入（イ）り明（アキラ）ちあれ
 ども雲霧（クモキリ）を覆ふあらむ。今（イマ）は始め

●サシクセ獨吟

ツレサシ上

地

（聊カ静ニサラリ）
（前ヲ承ケテ運ビヨク）

ぬ事あれども歎きても又あまりあり
 良薬口は苦く忠言身は逆よといふ
 其故事を悟り給ひ藤房の御ハ世を
 遁れ今に成が白出も多きハ反さる我
 夫の心は猛の心なく清く世をいさ
 めんと思ふあり獅子の子を生
 むて三日を経る時ハ數千丈の崖より

地拍子

又 経ハ時ハ

ミ

地拍子

跳ねあがりて死
一持
セゴトノク
ミ

これや投げて試み其子獅子の氣力
 あれば教へざるは中より跳ねあがりて
 死せざるは入り。忍んや正行十歳は餘
 りぬ一言身は留めつ。此教戒は違を
 されあれ討死と聞くも歎きやわら
 めいづくまでも朝敵や平けて取軍の
 用けん事を思ふべし

地拍子

ヨク持
ソクまで
ミ

耳拍子

ミ

南 各

上

日の本よ 地 (前ヨリ運ビヨク) 羽ののし 嘴を鳴らさむ。

命のあらん其程の帝位を守護し

私の心いさかあき跡は清名を残さず

あつれ 特ニ 生ひては思ひ撫子よあはれ

楠の露 打切 時も頃ハ五月雨のあ

枝も繁る下草の葉よ志をる袂あ

花散りて春の暮れに櫻井の名よ

なよありておちせむ シテ上 (確カニシテ) 今もある

てま楠の葉の恨も何らあまぶあ

人までもあはれ知る 地中 (前ラ承テテ温ヤカニ) 恩愛

親子 子方 (スラリ) 別も今更な涙や

袖に満一が シテ上 (英カニサラリ) お酌よ立ちてとりあへむ

清き名を千代に傳へて ツヨク (拍子不合) 菊水の

流るる 地 (カウツテスツキリト) 諸人の鑑と 男舞

南

合方心得
句いぬるやあ終
句句末、かな前
ヲ八拍子ニ延ベテ取
ルヲ要ス

ありてまきらちのの(拾字合ん)花橋の白ひ
ぬのあま白ひぬのあ(打上頭ニ付)あ(温メヤカニ流マズ)かきて時
刻も後もある(地上)とくく帰れといさ
ぎよまき行よ後よま後らつきぬ涙を
ひるがへしその名も清き河内(ガワチ)の國へ
帰る孝行とまある中心義のあり(ヤシ)いさ
なりぞありがたま

柳 雷

菊慈童

解題

魏の文帝の臣下、勅を蒙りて酈縣山の麓に流る、薬の泉の源を尋ね入りしに、周の穆王の時より菊より成る長篇なりしが、後世専ら祝言能として演舞する便を旨とし、其前後を省き、後段の文をも約めて、今日の如く半能の曲とせり。省かれたる前段は、穆王の代に慈童過つて帝の御枕を越えたる罪に依り、官人に護られて酈縣の深山に捨てらる、一條を作れるものなり。古くは枕慈童と稱へしが、前段と、枕の偈文につきて作れるサシ、クセの一章とを省きしため、作中枕の事少くなりしより今日の如く改めたりと見ゆ。別名を酈縣山といふ。酈縣は太平記の傍訓にも「てつけん」と見え、古く「てつけんざん」と讀みたるより、曲名をてつけん山と記したるもあり。又枕慈童を略して枕といへるもあり。類曲、枕慈童(此曲と同名なるも同じからず)、菊慈童(同じく別曲。一名、彭祖仙人、廢曲)、菊水慈童(一名、菊水、廢曲)は皆此曲に學びたる後作なるが如し。

謠ひ方便概

枕慈童の姉妹曲なり。全篇軽くすらりど、暢びやかに爽やかなるべし。

シテ

童子なれば重くならぬやうに注意して聲も餘り下に取りこまなく、稍確りめに滞りなきを宜しとす。サシは其身のなれる果を啣ちつぶやく心なれども、さして聲を抑へず、又沈鬱に陥らぬやうさらりと謠ふ。ワキとの問答になり、「人倫通はぬ」云々は穩やかに承け答へ、「不思議や」云々は氣を起して少しかゝつて問ひ、「いや猶も」云々はすつきりと出で、「かたじけなくも」より丁寧に云ふべく、次の掛合、「枕の要文疑ひなく」はさらりと取り、連吟にて聊か鎮めて殊勝に扱ふべし。「ありがたの妙文やな」は位を有ちて大きやかに確りと出づべく、「本より薬の酒なれば」は音の縮まり好く謠ふ。

ワキ

健やかにハキ、とあるべし。名告の後「急ぎ候程に」は一息の間を取り氣を更へて別に出づ。

地

「夢もなし」云々の上歌はシテの氣を承けて稍ゆるやかに附け、「頼めにし」より聊か更へて少し氣を起す心なるべし。「此妙文を」云々は稍確りめに承けて、樂の前「面白の遊舞やな」と十分に鎮む。「すなはち此

文「以下は乗つて爽やかに調子好く扱ひ、引き續きキリにかけて、通じて御代を祝ひ、齡をことぶく心なるべし。」

辭解

山より山の云實際の道と政道とを言ひかけて深山の奥に至るまで道の續けるは君の徳政行き渡れる聖代なればなるべしの意とす。枕慈童の次第は此曲より取りたるなるべし。

魏の文帝

三國の魏。曹鄴河南省鄴州内郷縣にあり。荆州記に「鄴縣北八里有菊水」。讀史方輿紀要に「菊潭、在鄴縣北、源出縣西北之石湖山、匯而爲潭、傍生甘

菊、其水甘香、居人飲之、多壽、隋因以此名菊潭縣」。太平記に「彼の鄴縣といふ處は帝城を去ること三百里、山深うして鳥だにも鳴かず、雲暝うして虎狼充滿せり。されば假にも此山に入る人の生きて歸るといふことなし」。

又「慈童渴に臨んでこれ（菊の下露の滴りたる谷水）を飲むに水の味はひ天の甘露の如くにして恰も百味の珍に勝れり。（中略）此谷の流の末を汲んで飲みける民三百餘家、皆病即消滅して不老不死の上壽を保てり」。太平記

の慈童の事を記せる條（十三卷龍馬進奏）に、慈童鄴縣山にありて穆王より賜はりし普門品の二句の偈を菊の下葉に書きつけ其下露をすよりし功徳により八百年の間老を覺えず、魏の文帝の時彭祖と名を更へて帝に此菊

の下露の仙術を奉りたり、今の重陽の宴は其名殘なりとあり。但慈童と彭祖とは實際は別人なり。邯鄲の枕の夢廬生といへる少年、邯鄲の宿舎にて道

一生の榮華を盡したりと見て。慈童が枕太平記に「慈童と云ひける童子を穆王寵愛し給ふに依りて恒に帝

帝の御枕の上をぞ越えける、群臣議して曰く、其例を考ふるに罪科非淺、雖然事誤より出でたれば死罪一等を宥めて遠流に可被處とぞ奏しける、群議止む事を不得して、慈童を鄴縣といふ深山へぞ被流ける」。

古への云慈童の持てる枕は、廬生が百年の樂を夢みし枕と異り、此枕を見ては古の罪科を思ひ出し、夜の目に掛身を云慈童の持てる枕は、廬生が百年の樂を夢みし枕と異り、此枕を見ては古の罪科を思ひ出し、夜の目に知る袖涙に濡れたる袖。それに我身の罪を思ひ知る意を含めてい頼めに云引歌にやと

見出です。以下の文、戀の誓の頼みにならずして獨寝る時、共寝の枕に交したる詞を恨む意なるを、慈童が君寵を頼みしかひなく、名殘の枕につけて怨恨多きことに取りなしたり。枕詞とはこゝには同じ枕して契りし詞

の意。但、古歌云前の鄴縣山の解に引ける太平記の引文参照。野干虎狼野干は狐の異名。これは謠曲作者の添へたる詞なり。けしたる異様人倫人間

化生變化。妖怪。周の穆王周の第五周の代武王より赧王まで三十七世、次第に變る古くは「數代

り。「次第」は後世の誤傳。七百年太平記には八百餘歳とあり。但、穆王非想非々想佛教にて三界の中、無色界の

にては八萬劫の壽命を保つと説かる。二句の偈太平記に「穆王慈童を哀み思召しければ（中略）要文主要な具一る文句

切功徳所謂二句の偈文にて法華經普門品に出でたり。「一切の功徳を具して慈眼をもて衆生菊の葉云

妙文を聞くを菊の葉に掛く。太平記に「慈童、君の恩命に任せて、毎朝に一反此文を唱へけるが、若し忘れもせ

んずらんと思ひければ、側なる菊の下葉に此文を書きつけたり。それより此の菊の葉における下露、僅かに落

ちて流るゝ谷の水に滴りける。不老不死の藥鄴縣山の解に引ける汲む人も云「遊舞やな」までは古

にサシ、クセの長文あり。前シテを略したると同じ理由によ。淵ともなるや拾遺集の歌を引く。「我宿

積りて淵となるらん」。宵の間月は宵、その身も酔ひこしきたへの枕に冠する枕詞。手折り伏せて花を花を

菊花を直に薦としたるなり藥の酒この慈童の故事に生まれりといふ重陽の菊の酒は

装束附

シテ（慈童）

ワキ (敎使)

面慈童又は童子、黒頭、赤地金緞鉢卷、襟白赤、着附厚板、半切、法被又は唐織壺折、縫紋腰帶、菊葉團扇。
唐冠、金地鉢卷、着附厚板、白大口、袷狩衣、紋附腰帶、扇。
ワキツレ (從者二人)
洞烏帽子、着附厚板、白大口、狩衣、腰帶、扇。

四番目
畧脇能
切能(祝言)

菊慈童

九月

シテ 意童
ワキ 魏文帝臣下

ワキ次第上 (健カニハキト)

返シ (三人)
ツヨク (拍子合)
山より (三)

山より山の奥までも山より山の奥までも
道あるや時代あるらん
魏の文帝は侍奉の臣下あり。さても
我が君の宣旨より。鄜縣山の麓より
薬の水涌き出でたり。其水よを見て
まゐれもの宣旨を被り。唯今山路よ

山より山の奥までも山より山の奥までも
道あるや時代あるらん
魏の文帝は侍奉の臣下あり。さても
我が君の宣旨より。鄜縣山の麓より
薬の水涌き出でたり。其水よを見て
まゐれもの宣旨を被り。唯今山路よ

ありつ。い。ち。あ。る。者。ど。名。や。名。の。れ。シテ(穩カニキツバリト) 人倫
 通。を。ぬ。處。を。ら。ざ。其。方。を。と。そ。代。生。の
 者。と。申。ま。げ。は。び。と。い。つ。周。の。移。ま。よ
 君。一。使。を。わ。し。一。意。喜。里。を。あ。れ。る。果。ぞ
 早。カ。上(健カニサラリ)
 とも。ツヨク(拍子不合) とい。わ。れ。不。思。議。の。い。ひ。事。也。な。
 行(渡ニナク) 眞。一。か。ら。も。周。の。代。の。既。は。數。代。の
 その。か。み。も。て。王。位。も。其。數。移。り。ま。ぬ

シテ(氣ヲ起シテシカウツテ) 不。思。議。也。あ。れ。る。其。ま。い。よ。て。昨日。や
 今日。の。思。ひ。一。は。次。第。の。變。ひ。の。か。み
 今。魏。の
 今。魏。の
 文帝。前。後。の。向。七。百。年。は。及。び。たり。
 非。想。非。非。想。の。知。ら。も。人。向。は。お。し。て。今
 ま。で。生。け。る。者。あ。ら。う。い。つ。た。ま。は。な。は。の
 者。や。ら。う。と。身。の。怪。め。や。ぞ。あ。ら。う。い。つ。

シテ (スツキリト)

い。や。猶。も。そ。あ。た。と。と。代。生。の。者。と。申。

ま。げ。ひ。の。赤。く。も。帝。の。ほ。げ。杖。よ。こ。向。の

偈。や。書。ま。は。送。入。賜。さ。り。た。り。ま。さ。ら。よ。り。杖

を。法。賢。や。よ。こ。の。不。思。議。の。事

あ。り。と。あ。の。く。ま。さ。ら。よ。り。讀。み。て。見。れ。ば

杖。の。要。又。疑。ひ。なく。具。一。切。功。徳。慈。眼

視。衆。生。福。壽。海。無。量。是。故。應。頂。禮

地上 (穩健ニ池ニナク)

●切込雑子 (拍子合)

此。妙。文。や。菊。の。葉。よ。置。く。去。た。り。や

露。の。身。の。不。老。不。死。の。藥。と。あ。り。と

七。百。歳。や。送。り。ぬ。る。は。む。く。も。は。ま。ま

も。も。延。ぶ。る。や。千。と。せ。あ。ら。ん。面。白。の

遊。舞。や。あ。り。が。た。の。妙。文。や。あ

ま。あ。ま。ち。此。文。菊。の。葉。よ。ま。あ。ま。ち。此

文。菊。の。葉。よ。悉。く。あ。ら。せ。る。は。い。げ。し。や。

地上 (奥カニ運ビヨク)

●仕舞獨吟 (拍子合)

あ。り。が。た。の。妙。文。や。あ

白

粟もヨク芳コトバしくク滴ツりもク白クひク。涸クもクあ
 っクやク。合ク陰クのク水クのク。處クのク。鄰ク縣クのク山クの
 滴クりク。菊ク水クのク流ク。しクづクみクのク本クよりク酒クあ
ニれクどク。汲クみクてクのク進クめク掬クひクてクのクほクとクこクし。
 我クがク身クもク飲クむクありク飲クむクありクやク。月クの
 宵クのク向ク其ク身クもク醉クよクひクあクれクてクよクろ
 よクろクよクろクくクとク。たクらクよクびクよクろクてク。枕クを

滴り菊水の流

とうクぞク戴クきク奉クりク。びクもクあクつクたクまク
 君クのク盛ク徳クとク岩ク根クのク菊クをク。手ク折クりクあクせ
 手ク折クりクあクせク。まクきクたクへクのク袖ク枕ク。花クをク席ク
ニよク臥クたクりクけクりク。本クよりク薬クのク酒クあ
ニれクどク。本クよりク薬クのク酒クあクれクばク。醉クよクも
 侵クさクれクどク其ク身クもク変クらクぬク。七ク百ク歳クをク。
 たクもクちクぬクもク。此クはク伊ク枕クのク故クあクれクどク。いクろ

菊慈旨

五

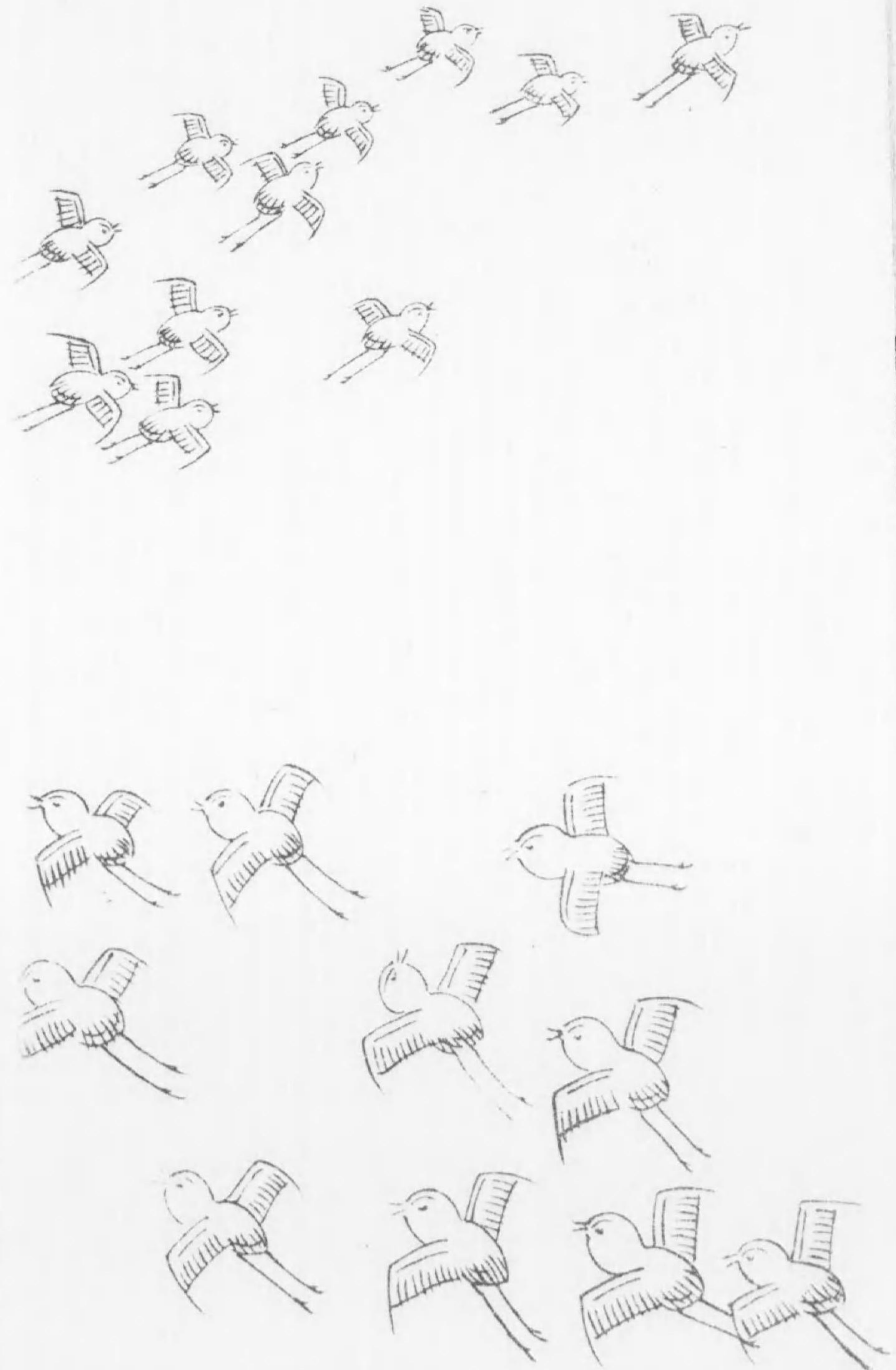
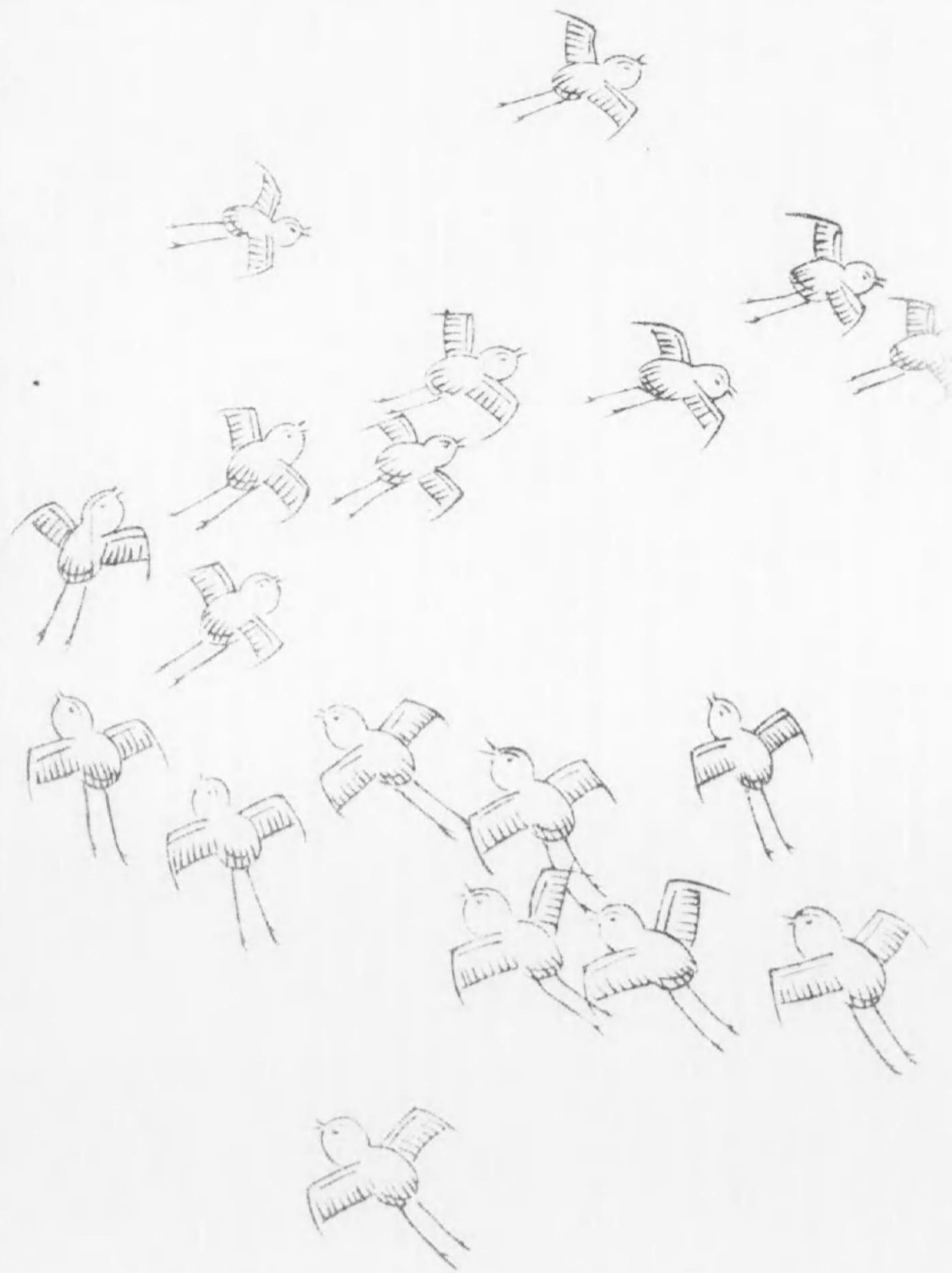
よもぐさーま千秋の帝萬萬歳の我が
 君と祈る意重里が七百歳や我が君よ
 授け置きき處ハ郡縣の山路の菊水
 くみやびまへや飲むとも飲むとも盡
 きやせーや盡おせーと菊かまわけて
 山路の仙家よ其まの意重ハ入りよ
 けり?

大正十四年十月五日印刷
 大正十四年十月十日發行
 觀世流改訂活本
 大正十三年版

訂正者 丸 岡 桂
 東京市神田區今川小路三丁目九番地
 發行者 土 居 源 太 郎
 東京市神田區東松下町十二番地
 印刷者 鈴 木 彌 作
 東京市神田區東松下町十二番地
 印刷所 信 英 堂 印刷所
 東京市神田區今川小路三丁目九番地

發行所 觀世流改訂本刊行會
 電話四谷 五九五七番
 振替東京 一三四七五番

306
849



終